

ピアホームだより

2016. 1. 10

新年を迎えて

グループホーム運営を始めて6年、それまでは比較的恵まれた環境の中で問題の少ない時間を送っていましたが、わずかな期間で普通の人生を送っている経験し得ないような体験や重い人生を生きる人達に身近に接し、少しは人間が出来て来たかも知れません。

そして、障害はその人の人生にダメージを与えるばかりとは限らず、むしろ豊かにしている例もあることに気付きました。背伸びすることなく、それなりに自分の持てる力を発揮し、素直な自分を出して生きることの方が人生楽しい！！

精神障害者の中にいる時、むしろ本音トークが出来ることが多いと感じています。自分のダメなところもさらけ出して、必死に(軽いウソで逃げたり?)生きてる彼らがやっぱりいいんですね。

私も70歳の方が近くなってしまいましたが、

彼らと居ることで元気いっぱいです。少しでも長く同じ道を一緒に歩いていけたらいいですね。

第58回日本病院・地域精神医学会に参加して来ました。

オープンダイアログの紹介—斎藤環—向谷地生良トークセッションから

オープン・ダイアログ (open dialogue)』とは、統合失調症に対する治療的介入の手法で、フィンランドの西ラップランド地方に位置するケロプダス病院のファミリー・セラピストを中心に1980年代から実践されているものだそうです。

毎日、一定の時間、会話するというだけのシンプルなもので向精神薬をほとんど使わなくてもよいといえます。患者を批判しないでとにかく会話する—などのルールがあります。統合失調症患者は(創造的である反面、極言すれば病的でもある)モノローグに陥りやすく、そこから開放することを目標とします。—(ウィキペディアより)

べてるの当事者研究との比較

北海道浦河における向谷地—川村先生の取り組みに関心を抱いたのはもう15年ほど前、現

地にも足を運び当事者が妄想を面白おかしく語る姿に衝撃を受けました。SSTなどの理念をとり込みそれを発展させて、今では当事者研究へと発展させています。

両者は同じ位置に立っていると思われませんが、違いを比べてみると

- ① フィンランドは専門家の立場を崩さないが、べてるは当事者と同じ目線に立っている。
- ② フィンランドはプライバシーに厳格で、個人情報を守るが、べてるは隠さないこと共有することを目指している。

べてる信奉の私としては、べてるはより当事者の中に入り込んでいる分、先に行っていると感じました。

1950年後半心理社会療法としてカリフォルニアで検討されて来た流れがヨーロッパに受け継がれていることを調べたことがありますが、ヨーロッパの片隅で結実した?と云っては失礼でしょうか? 基本的には薬物だけに頼らずリハビリの重要性を証明しているものと思います。グループホームの理念に通じるものでしょう。

今後のスケジュール

<1月30日>アドボケイト会理事会